『フッサール研究』第 16 号（2019）19–35

# 『イデーン I』における時間論の棚上げは適切だったのか

佐藤　大介
（岡山大学）

## はじめに

『イデーン I』では、時間に関する議論に深く立ち入ることが、意図的に避けられている。これについてフッサールは、1930 年に公刊された「拙著《純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想》の後記」、いわゆる『イデーン I』の「あとがき」で、次のように述べている。

> 〔『イデーン I』で〕記述される領圏は、比較的容易に近づくことのできる水準のものに限られている。すなわち、内在的時間領圏の時間化の問題は、取り除かれたままである。（『哲学および現象学的研究のための年報』第 9 巻で公表された、内的時間意識に関する私の 1905 年の講義を参照。）（V, 142、〔 〕内は引用者による補足）

同様の記述は、『イデーン I』の中にも見出せる。

> 幸運にも、われわれは、準備的分析においては、その分析の厳密さを危険に晒すことなしに、時間意識の謎に立ち入らないでいることができる。（III/1, 182）

この一節にある「時間意識の謎」には、次のような注が付されている。

> これに関する、永きにわたって無駄にも思われた著者の努力は、1905 年に本質的な点で完結へと至り、そしてその成果は、ゲッティンゲン大学での講義におい

て伝えられた。（III/1, 182）

1905 年の「講義」で伝えられた「成果」は、そののちの 1928 年に、『内的時間意識の現象学』として公刊されている。これを踏まえて言えば、上のいくつかの箇所を次のようにまとめることができる。すなわち、『イデーン I』での議論にとって、『内的時間意識の現象学』での議論は、さしあたり踏み込まなくて差し支えないものである、と。

しかし、こうした自己理解は本当に正しいのだろうか。ここには検討すべき点があるように思われる。というのも、現実的なものに関する『イデーン I』での議論には、時間が深く関わるからである。その議論は、簡潔に言えば、〈われわれがものごとを現実的であると認める際、どのような仕方が最も正当なのか〉という問いに答えようとするものである。フッサール現象学では、何かが成り立っていると見做すことを「定立（Setzung/Thesis）」と呼ぶことから（cf. III/1, 239, 260, 268–269）、この問いは次のように定式化されるとみてよい。すなわち、〈ものごとを現実的なもの（Wirklichkeiten）として定立する正当な仕方とはどのようなものか〉、と。本論ではこれを、〈現実性の問題〉と呼ぶ。フッサールは『イデーン I』で、現実性の問題に、〈現出（Erscheinen）による動機づけ（Motivation）〉という概念を用いて答えている（cf. III/1, 314–337）。これは、現実的なものを明証的に定立する際の意識のメカニズムを指す。簡潔に言えば、対象が原的所与性を具えて現われ出ること、すなわち、対象が今まさに「生身のありありとしたさまで／有体的に（leibhaftig）」与え示されていること、これに動機づけられた定立の仕方が、最も正当な仕方だとされるのである（cf. III/1, 14–15, 51, 314–316）。しかし、原的所与性を具えた現出として認められるものは、そのつどの今において確かめられているものだけである。これは絶え間ない時間的流れの中でそのつど入れ替り、次々と変ってゆく。それゆえ、現実的なものの明証的な定立を論じるためには、時間に関する議論が必要なのではなかろうか。つまり、『内的時間意識の現象学』での議論を補えば、現実性の問題に対する『イデーン I』での解答は、より明確になるのではなかろうか。本論の目的は、これを示すことにある。

そのために本論では、次の手順で考察を進める。まず、『イデーン I』での議論に、時間に関係する不明瞭な点があることを指摘する（**第 1 節**）。次に、『内的時間意識の現象学』をテキストとして、その不明瞭な点を補うために必要な議論を再構成する（**第 2 節**）。そして、この議論を『イデーン I』での不明瞭な点に補う（**第 3 節**）。そのうえで、『内的時間意識の現象学』での議論が『イデーン I』での議論に組み込まれ

なかった理由を吟味する（**第 4 節**）。

## 第 1 節　意味志向の充実

フッサールは『イデーン I』で、超越的な対象が現実的なものとして定立される仕方を主題的に論じている。この議論の中に、時間に関係する不明瞭な点が含まれている。本節では、これを指摘する。

フッサール現象学において対象が超越的であるとは、それが意識の志向的な相関者となってはいても、それ自体まるごと与えられてはいないことを指す（cf. III/1, 91–92）。言い換えれば、それは、その当の意識体験の「実的な成素」とはなっていない（cf. III/1, 78–79）。超越的な対象として『イデーン I』の中で主に取り上げられるものは、事物である[1]。事物は、「未規定性の地平」を伴って現出する（cf. III/1, 91–92）。すなわち、それ自身は「射映（Abschattung）」を通して、「一面的」にのみ現出する（cf. III/1, 84–85, 88, 91）。例えばサイコロの場合、それは、その六面すべてが同時に現れることはなく、多くとも三面までしか同時に現れることはできない。事物知覚には、こうした「不十全性（Inadäquatheit）」が具わっている（cf. III/1, 91）。ただし、その未規定性の地平は、対象の「意味」が規定されている場合、その「意味」によってあらかじめ「下図」を描かれたものとして志向されている（cf. III/1, 91）。サイコロの例に照らして言うと、次のようになる。現出している面が 1 の面・2 の面・3 の面であるとしよう。この場合、対象が「サイコロ」として規定されている以上、その対象には残り三つの面があり、そこには 4 と 5 と 6 が印されているはずだ、というように、その未規定性の地平には下図が描かれている。

超越的な対象の上述の特徴は、内在的な対象と対比することでさらに浮き彫りにされる。内在的な対象とは、それを捉える意識作用の実的な成素となっており、射映的には現出しないものである（cf. III/1, 78–79, 88, 92）。私の意識体験となっているものが、これにあたる。例えば、メロディーを聴くという私の意識体験や楽しいという私の意識体験である。これらは内在的な知覚と「ただ一つの具体的なコギタチオという、無媒介的な統一」を成している（cf. III/1, 78）。つまり、この場合、「〔内在的な〕知覚作用は、その客観を自分自身のうちに含み込んでいるので、知覚作用は、その客

1. 他にも、本質、他者、神が、超越的なものとして指摘されている（cf. III/1, 78, 124）。しかし、これらについては、『イデーン I』では深く踏み込んで論じられていない。そのため、同書を主なテキストとする本論では、それらを主題的に扱わない。

観から、ただ抽象的にのみ、つまり本質的に非自立的なものとしてのみ、切り離すことができる」（III/1, 78、〔 〕内は引用者による補足）。ここで注意すべき点は、意識体験ならば何でも、内在的な対象となりうるわけではない点である。例えば、昨日行われた想起を今想起する場合が、これに当たる（cf. III/1, 79）[2]。というのも、「今行われている想起には、当の想起されている昨日の想起が、今の想起の具体的統一の実的成素として一緒に帰属してはいない」（III/1, 79）からである。つまり、両者の間には、時間的隔たりがある。

超越的な対象の定立は、未規定的な地平が新たな現出によって規定されてゆくのに伴って、明証性の「重み」を変動させる（cf. III/1, 319–321）。つまり、未規定性の地平が少なければ少ないほど、対象が〈何〉であるのかが変更される可能性は低く、こうした点で、その定立はより確かである。そこでフッサールは、原的明証とは異なった尺度として、「十全的な明証（adäquate Evidenz）」と「不十全的な明証（inadäquate Evidenz）」との区別を導入する（cf. III/1, 321）。十全的な明証とは、「原理的にもはや『力を強め』たり、あるいは『力を殺い』だりすることができず、したがって、重みに程度の差異がない」明証（III/1, 321）を意味する。内在的な対象についての定立は、この明証性を具える。例えば、楽しいと感じた体験自体は、のちに変更されることはなく、絶対的に確かである。不十全的な明証とは、その重みを「増加あるいは減少することができる」明証（III/1, 321）を意味する。超越的な対象についての定立は、この明証性を具える。言い換えれば、その定立は、「『最終的』なものであることはできず、それらはことごとく、『克服不可能』であることはできない」（III/1, 319）。

原的直観が調和的に進行していくことによって、定立の明証性が重みを増していくこと、これが、フッサール現象学では意味志向の「充実（Erfüllung）」と呼ばれる（cf. III/1, 320, 334）。意味志向の充実においては、新たな現出が、先に描かれていた下図と調和するかたちで、未規定的であった地平を規定する（cf. III/1, 319–320）。上で挙げたサイコロの例に照らせば、次のようになる。眼前の対象が〈サイコロ〉として志向されており、1 の面・2 の面・3 の面が現出している。ここからさらに、4 の面、5 の面が現出してゆけば、それを〈サイコロ〉と捉える意味志向は、より充実することになる。とはいえ、原的直観の進行とともに、必ずしも意味志向の充実が成り立つわけではない（cf. III/1, 319–320）。すなわち、新たな現出が先に描かれていた下

2. 他者の意識体験も、その例に該当する（cf. III/1, 78）。私が推し量る他者の感情は、今私が思い浮かべている私の感情を介して、推し量られた他者の感情であらざるをえない。それゆえ、それは、私の意識体験と無媒介的な統一を成しているわけではない（cf. III/1, 78）。すなわち、それは、超越的な対象である。

図と調和しないならば、その現出が「より強力な理性動機」となって、定立の明証性はそれ以前の定立が具えていた明証性と比べて、その重みを減少させる（cf. III/1, 319–320）。先程のサイコロの例に照らせば、球面が新たに現出したり、壁に刺すための鋲が付いた面が新たに現出したりすれば、その対象が〈サイコロ〉であるという意味志向は充実しない。『論理学研究』では、こうした場合が「幻滅（Enttäuschung）」と呼ばれている（cf. XIX/2, 574–576）[3]。

意識の志向性は、基本的には、意味志向の充実を目指す。というのも、意識は、対象を〈何〉として志向するからである。フッサールはこのことを、意識の目的論的な機能として際立てている（cf. III/1, 196–197）。すなわち、意識は、現出の多様を同一の〈何〉として統一しようと働くのである（cf. III/1, 196–197）。それゆえにこそ、幻滅もまた成り立つ。つまり、意識が意味の下に多様な現出を統一するという目的に向かわなければ、それが上手くいかずに幻滅するということもありえないのである[4]。

しかし、現実的なものを定立する最も正当な仕方に基づいて意味志向の充実が成り立つのか、この点が不明瞭である。より具体的に言えば、次のようになる。現実的なものを定立する最も正当な仕方は〈現出による動機づけ〉であり、これは〈今〉において成り立つとされる。これに対して、本節で論じたように、意味志向の充実は、原的直観の進行という、時間的に〈流れる〉ことの中で成り立つとされる。そうすると、〈今〉という時間的契機と〈流れる〉という時間的契機、これらはどのように関わり合うのだろうか。〈流れる〉ということは、〈今〉がそのつどもはや〈今〉ではなくなることである。それに代わって新しい〈今〉が現われるとしても、そのつどの〈今〉の原的直観における原性は、失われざるをえない。こうした原的直観の進行・流れの中で、〈現出による動機づけ〉に基づいた意味志向の充実が成り立つとすれば、そこでの意識の働きは、どのようなものなのだろうか。

上の不明瞭な点は、定立の真理性に関する議論に深く関わる。この議論は、『イデーン I』の主に第 4 篇後半で展開されている。これについては、第 3 節で取り上げる。その前にまずは次節で、その不明瞭な点を明瞭にするための鍵となる議論を、『内的時間意識の現象学』をテキストとして示したい。

---

3. さらに細かく言えば、幻滅には二つの場合がある。一つは、新たな理念が示される場合である。つまり、以前の定立が破棄されると同時に、変更された新たな意味がその対象を規定する場合である。上のサイコロの例に照らせば、新たに現出してくる面に鋲が付いているために、それが新たに〈画鋲〉として規定される場合である。もう一つは、以前の対象が破棄されるが、その際に新たな意味によって規定されない場合である。すなわち、対象が混沌としたありさまで現出しているために、対象が〈何〉であるのかが規定できていない場合である。

4. このことを、『論理学研究』をテキストにして詳しく論じたものとして、植村 [2017, 182–186]を参照。

## 第 2 節　把持 - 原印象 - 予持

フッサールは、『内的時間意識の現象学』の主に第 1 部第 2 章で、〈今〉における意識の働きを主題的に論じている。本節の目的は、この議論を再構成することである。なお、本節では、ほとんどの解釈者が認めるであろう、中立的な解釈をできる限り採る。これに基づいて十分に、『イデーン I』で不明瞭になっている点を補うことができる。

『内的時間意識の現象学』の目的は、時間意識の解明にある（cf. X, 4）。時間意識という語は、時間の流れについての意識や、過去・未来といった時間についての意識など、時間性についての意識を包括的に意味する。ただし、ここでの時間は、「客観的時間」ではなく、「現象学的時間」である（cf. III/1, 180–181; X, 4–7）。客観的な時間とは、時計や天体の運動などを用いて測定される時間、例えば〈2017 年 9 月 5 日〉や〈3 時間後〉といった時間を意味する。また、現象学的時間とは、体験される時間、例えば〈今〉〈さっき〉〈まだ〉といった時間を意味する。こうした時間は、何もない真っ暗な空間にいることを想像してみると、際立ってくる。われわれは、そのような空間にいたとしても（あるいは、そこにいることでよりいっそうのこと）、まさに流れてゆく時間性を感じ取ることができるだろう。なお、本論では以下、特に断らない限り、時間という語は現象学的時間を指すものとする。

時間意識の解明においては、〈今〉における意識の働きについての分析が、その中心的な役割を担う。というのも、フッサールは、時間性の「根源」が〈今〉にあると、見定めているからである。〈今〉という語は、現象学的時間としては、意識がまさに働いている場面を指す。ここにおいて、流れ来ては流れ去るという時間の最も基本的な在り方が現われてくる。つまり、〈今〉において、時間の原初的な差異が意識されるのである。

フッサールは、〈今〉における意識の働きを分析するにあたって、〈メロディーのような通時的な対象がどのように構成されるのか〉という疑問を足掛かりとしている（cf. X, 22–23）。「構成される（sich konstituieren）」とは、或るものごとが、意識との志向的な相関関係において現われ出ることを指す[5]。上の疑問は、あらゆる現象が時間の流れの中にあることに基づいて、通時的なものの構成について問う、素朴な疑問である。メロディーの知覚に照らして言えば、次のようなものである。メロディーの

5. 「構成」概念についてのこうした解釈は、それについて解釈する誰もが共有すべき、最小限の条件である。本論では、「構成」概念をこれよりさらに立ち入った条件で規定する必要はない。その最小限の条件で規定しておけば、本論以下の議論で大きな支障は生じない。

知覚において、メロディーを織り成す個々の音は、そのつどの今において現出し、第一の音、第二の音、第三の音…と次々に流れ来ては流れ去る。メロディーはこのように流れつつあるところにはじめて成り立つ。しかし、今が点のような瞬間だとすれば、「第二の音が鳴るときには、私はその音を聞いているのであって、最初の音はもう聞いていない、と言うべきではなかろうか」（cf. X, 23）。つまり、「私は本当はメロディーを聞くのではなく、個々の現在する音を聞いているにすぎない」のではないのだろうか（cf. X, 23）。さしあたりこの疑問に対して答えるとすれば、われわれがメロディー知覚において聞いているものは、あくまでメロディーであるということになろう。メロディー知覚における志向的対象が、個々の音ではなくメロディーであることは、疑いようのない体験の事実である。しかし、こうした事実を述べただけでは、上の疑問に対して十分に答えたことにはならない。それに十分に答えるためには、一つのメロディーという通時的なものがそのつどの今においてどのように意識されるのか、意識の動態的な働きが体験の事実に基づいて記述されねばならない。

フッサールは上の疑問に答えるにあたって、〈今〉に幅があることを持ち出す。意識が働いている場面を具体的に見てみれば、対象が構成されている〈今〉は、決して点のような瞬間的な今ではなく、幅を持った今である（cf. X, 40, 85–86）。点のような瞬間的な今は、具体的な今から抽象される極限概念にすぎない（cf. X, 40）。具体的な〈今〉は、〈まさに今〉、〈つい先ほど〉、〈まさにもうすぐ〉といった時間的位相から成る、「切れ目なき統一」なのである（cf. X, 85–86）[6]。

フッサールによれば、〈今〉が具える幅は、何がそのつど志向されているかによって変動する（cf. X, 38–39）[7]。例えば、今の幅は、一つのメロディーが志向されている場合の方が、一つの音が志向されている場合よりも広い。本論では、こうした〈今〉の〈幅〉がどこまで及ぶのかについては立ち入らない。というのも、ここでの眼目は、具体的な〈今〉には必ず〈幅〉が具わっていること、これを確認するところにあるからである。

フッサールは、〈幅のある今〉を捉える意識の機能形式を示すために、〈把持 - 原印

6. こうした〈幅のある今〉という概念は、〈今〉という語の使われ方にも表れている。われわれは「今」という語を、例えば、「今食べた」や「今行く」というように用いる。この際、客観的時間に照らして言えば、「食べた」のは 3 秒前であったり、「行く」のは 3 秒後であったりする。このように、〈今〉という語は、日常的には〈幅〉をもつものとして用いられている。もちろん、こうした用語法は、〈今〉に幅があることを直接根拠づけるものではない。しかし、こうした点を踏まえれば、〈幅のある今〉という概念は、より違和感なく受け入れられるかもしれない。さらに、フッサールが〈今〉の実相をどのように見定めていたのかを考察する上で、そうした日常的な場面は大きな手掛かりになるだろう。

7. ヘルトはこれについて、『内的時間意識の現象学』以外の広範な典拠も用いて詳しく解釈している（cf. Held [1966, 26–27]）。

象 - 予持〉という概念を導入する（cf. X, 29–40）。把持（Retention）とは、〈つい先ほど〉という時間的位相についての意識であり、予持（Protention）とは、〈まさにもうすぐ〉という時間的位相についての意識である。原印象（Urimpression）とは、把持および予持における位相の間として際立たせられる、〈まさに今〉という時間的位相についての意識である。把持・原印象・予持は、それぞれが想起・知覚・予期のようにそれ自体で何かを主題的対象とする意識作用ではなく、〈つい先ほど〉〈まさに今〉〈まさにもうすぐ〉という原初的な時間的差異を保ちながらも同じ今の意識における構造契機である。つまり、〈まさに今〉という位相はもちろんのこと、〈つい先ほど〉という位相も〈今もなお〉把持され、〈まさにもうすぐ〉という位相も〈今から〉予持されている。ここで注意しておくべき点は、把持・原印象・予持がそれぞれ抽象的契機だという点である（cf. X, 40）。すなわち、それらは、メロディーが聞こえているというような具体的な体験の事実に基づいて、そこでまさに働いている意識から役割に応じて析出されたものである。

〈把持 - 原印象 - 予持〉という機能形式は、意識作用の種別に関係なく、あらゆる意識の働きに共通している。これまでは特に知覚を取り上げてきたが、例えば、想起や想像も、その機能形式を具えている（cf. X, 35–36）。ただし、本節では引き続き知覚を取り上げ、想起や想像などをそれぞれ個別に立ち入って分析はしない。というのも、本論での主題は、〈現実的なものを定立する最も正当な仕方〉、すなわち〈現出による動機づけ〉にあり、これに深く関わるのは、知覚だからである。

上述の意識の機能形式を用いて、〈メロディーのような通時的な対象がどのように構成されるのか〉という疑問に答えが与えられる。すなわち、〈把持 - 原印象 - 予持〉という形式を具えて意識が時間的流れの中で働くこと、これが、その構成を可能にしているのである。例えば、A 音 B 音 C 音から成るメロディーが知覚において構成される場合、次のようになる。音 B を〈まさに今あるもの〉として捉えつつも、音 A を〈つい先ほど過ぎ去ったもの〉として〈今もなお〉把持し、音 C を〈もうすぐ到来するであろうもの〉として〈今から〉予持すること、これらが同じ今において成り立っていることで、それぞれの音がそのつどの〈今〉においてメロディーという流れとして構成される。そして、そこにおいて原印象であったものが、次の新しい今においては把持されたものに移り、それとともに先程予持されていたものが新しい原印象となることで、そのつどの今を貫いて連続する一つのメロディーが構成される。

以上のように、フッサールは、現出が流れ来ては流れ去る中で、対象が、瞬間的な今を寄せ集めて構成されるのではなく、幅のある今において時間的統一として構成されることを示している。本論では以下、この議論を簡潔に〈時間論〉と呼ぶ。次節

では、時間論を『イデーン I』での議論に補いたい。

## 第 3 節　真理追求のための方途

第 1 節で示したように、〈現出による動機づけ〉に基づいた意味志向の充実が成り立っている際、そこでの意識の働きがどのようなものなのか、この点が『イデーン I』では不明瞭であった。別言すれば、一方で〈現出による動機づけ〉は〈今〉において成り立つとされ、他方で意味志向の充実は時間的に〈流れる〉ことの中で成り立つとされるが、〈今〉という時間的契機と〈流れる〉という時間的契機とがどのように関わり合うのか、この点が不明瞭であった。本節では、前節で示した時間論を用いて、こうした点を明瞭にする。そのうえで、定立の真理性に関する『イデーン I』での議論に、踏み込んだ解釈を与える。

意識が〈把持 - 原印象 - 予持〉という機能形式を具えることを踏まえると、意味志向の充実は、流れを具えた〈幅のある今〉において成り立つ。すなわち、把持されたもの・原印象・予持されたものが、そうした〈今〉において、同じ一つの意味のもとに調和しているということ、これが、意味志向の充実を可能にするのである。これに対して、幻滅は、把持されたもの・原印象・予持されたものが、そうした〈今〉において、同じ一つの意味のもとに調和しないことで成り立つ。

超越的対象の種別によって構成のされ方は異なっていても、流れを具えた〈幅のある今〉において意味志向の充実が成り立つことに、変わりはない。これまでに例として用いたメロディーとサイコロに照らして、確認してみよう。メロディーは、一つ一つの音が流れ来ては流れ去ることにおいて構成される通時的な統一であり、サイコロは、最大三面までが同時に現われ出ることにおいて構成される共在的な統一である。このように両者の構成のされ方は異なる。より具体的に言えば、この違いは、現出の順番が、その対象が何であるのかに反映されるか否かにある。メロディーの場合、その現出の時間的順序がそのまま、その対象が何であるのかに反映される。つまり、A 音 B 音 C 音がこの順に流れることから成るメロディーは、A 音 B 音 C 音がこの順に現出してはじめて、そのメロディーとして構成される。当然ながら、A 音 B 音 C 音が同時に現出したり、A 音 C 音 B 音の順に現出したりしては、そのメロディーが構成されてはおらず、他の旋律のメロディーが構成されることになる。サイコロの場合、その現出の時間的順序がそのまま、その対象が何であるのかに反映されない。つまり、1 の面、2 の面、3 の面の順に知覚されようと、1 の面、3 の面、2 の面の順

に知覚されようと、それは同じサイコロである[8]。しかし、メロディーとサイコロとの間に以上のような違いがあるとしても、それぞれの意味志向の充実は、流れを具えた〈幅のある今〉において成り立つ。メロディーという意味は、A 音が把持され、B 音が原印象となり、C 音が予持されたうえで、次の新しい今において、B 音が把持へ、C 音が原印象へと移りゆくことで、充実されていく。サイコロという意味も、1 の面、2 の面、3 の面の順であろうと、1 の面、3 の面、2 の面の順であろうと構わないが、それらがそれぞれ把持・原印象・予持となったうえで、次の新しい今において、原印象であったものが把持へ、予持されたものが原印象へと移りゆくことではじめて、充実されていくのである。

以上のように、流れを具えた〈幅のある今〉において意味志向の充実が成り立つことは、フッサールが『イデーン I』で呈示した真理概念に、深く関わる。

同書においてフッサールは、定立が真理である条件を、それが原的かつ十全的に明証であることに見定める。フッサールは次のように述べる。

> 原理的に、（無制約的な本質普遍性というアプリオリにおいて）、対象それ自身が、原的に、かつ、完全に十全的に把握されうる可能的意識という理念は、どんな「真実に存在する」対象にも対応する。逆に、この可能性が保証されている場合、まさにそのこと自体からして、その対象は、真実に存在している。（III/1, 329）

対象が「原的に」把握されるならば、それは、「根源的な」正当性を具えて定立される（cf. III/1, 316）。これは「根源的な」理性定立とも呼ばれる（cf. III/1, 329）。また、「十全的」に把握されることは、対象が如何なる未規定的部分も残さないように「完全に規定されて」定立されることを意味する。これは「完全な」理性定立とも呼ばれる（cf. III/1, 329）。「原的」かつ「十全的」、すなわち、「根源的」かつ「完全」ということ、これをフッサールは真理性の条件に据えるのである。したがって、「単に、『真実に存在する対象』と『理性的に定立されうる対象』とが、等価的な相関者であるだけではなく、また、『真実に存在する対象』と根源的かつ完全な理性定立において定立されうる対象とが、等価的な相関者でもある」（III/1, 329）ことになる。

フッサールは、超越的な対象についての定立であっても、真理性への通路が開かれ

8. こうした点を踏まえれば、意識の機能形式を分析するための題材としては、共在的な統一よりも通時的な統一の方が適している。つまり、通時的な統一の場合、流れを成してそれに含まれている諸契機を指標として、意識の働きを際立て易いのである。フッサール自身が明示しているわけではないが、意識の機能形式を分析する際の題材に、通時的な統一が頻繁に用いられるのは、そうした理由であろう。

ていることを強調している。一見するとこれは、フッサール自身が指摘した、超越的な対象の与えられ方が不十全的であることに、矛盾するように思える（cf. III/1, 330–331）。それについての明証は、原的ではあっても、不十全的でしかないのではなかったか。それゆえ、それは、上の真理性の条件を充たすことができないのではないか。これに対してフッサールは、次のように応じる。超越的な対象が具える不十全性は、「ひとまとまりの完結した現出において」成り立つ（cf. III/1, 331）。すなわち、その不十全性は、現出の絶え間ない流動を時間的に或る一定の範囲に限って固定するという、思弁的操作のうえに成り立つのである。フッサールは、現出の流動をこのように限定しないならば、事情は異なると主張する。すなわち、次のように主張される。

> しかし、それにもかかわらず、（カント的な意味での）「理念」として、完全な所与性が、下図に描かれている——すなわち、その「理念」とは、連続的な現出作用の果てしない諸過程が、その本質典型において絶対的に規定された体系のこと、もしくは、この諸過程の領野のことであり、その完全な所与性とは、種々様々ではあるが規定された諸次元を伴い、確固とした本質法則性によって支配された諸現出の、アプリオリに規定された一連続体のことである。（III/1, 331）

もちろん、事実上は、現出が或る範囲に限られる以上、その後の現出の進行を一義的に読み取ることは不可能であり、「無限に多くの可能性が、未決定のまま残り続ける」（cf. III/1, 332）。こうした「無限性」にこそ、超越的な対象の「超越性」がある（cf. III/1, 332）。しかし、対象をノエマ的な意味によって規定できるということは、その意味の理念性によって、そうした事実上の制約を乗り越えることである。すなわち、実現されるべきあらゆる可能な諸現出の連続体の「下図」として、対象の「完全な所与性」が与え示されているのである。しかも、そうした連続体の実現の可能性は、決して「空虚な可能性」、単なる無限の可能性として志向されるのではない（cf. III/1, 325）。それは、無限な可能性ではあっても、原的所与性によって「動機づけられた可能性」として志向されるのである（cf. III/1, 325）[9]。したがって、超越的な対象が或

9. ここで付け加えておくと、可疑性も、〈動機づけられた可疑性〉と〈空虚な可疑性〉とに区別できる。〈動機づけられた可疑性〉とは、〈現出による動機づけ〉に基づいた可疑性である。例えば、少し離れた場所にある柳の木の下に、人が動いていると思っていたが、それをよく見ていると、実はその枝が風に揺れているだけかもしれないと、疑わしくなっていることである（cf. III/1, 239–240）。これに対して、〈空虚な可疑性〉とは、そうした「理性的動機」なしに、「疑おうと思えば、疑うことができる」という「原理的な可能性」である（cf. III/1, 98–99）。例えば、眼前にあるものを捉えている知覚を、理性的動機がないにもかかわらず、錯覚や夢であるかもしれないと疑うことである（cf. III/1, 97–98）。

るノエマ的意味によって規定されるということは、その意味志向を充実していくことが理念的目標として示されることでもある。

上述を踏まえれば、原的直観が意味志向を充実することは、われわれが超越的な対象の真理性を確かめる方途を手にしていることを意味する。まさにこの意味で、原的直観は「正当性の源泉」である（cf. III/1, 43, 51, 326）。言い換えるならば、流れゆく〈幅のある今〉において対象を直接的に「見る」こと、これによってわれわれは真理性を追求できるのである。したがって、そこで目指される理念的目標は、空手形として掲げられているのではなく、そこへと至る方途をわれわれがもっているものとして掲げられていることになる[10]。

以上のように、意味志向の充実という概念に時間論を補うことで、現実性の問題に対する『イデーン I』での解答をより深く理解できる。このように時間論を用いることは、フッサールの意図から全く外れたものではない。たしかに、『内的時間意識の現象学』での議論は現実性の問題を主題的に取り扱ったものではない。また、同書で析出された〈把持 - 原印象 - 予持〉という意識の機能形式は、時間意識の解明を意図した文脈の中に位置づけられている。しかし、同書でも時間論が現実性の問題にとって重要な基礎になると考えられていることは、同書において〈今〉が「存在の生き生きとした源泉点」として呈示されていることから窺える（cf. X, 69）。フッサールは、これについて同書ではそれほど詳しく説いていない。しかし、「存在の生き生きとした源泉点」を『イデーン I』で示された「正当性の源泉」と同義的に解釈しても、差し支えないだろう。つまり、フッサールは『内的時間意識の現象学』で、〈今〉をわれわれが真理を追究するための核心的な場面に位置づけているのである。

## 第 4 節　『イデーン I』で時間論が棚上げされた理由

フッサールは、意識の機能形式についての分析成果を 1905 年のいわゆる「時間講義」の時点で手にしていたにもかかわらず、なぜこれを『イデーン I』（1913 年）で意図的に棚上げしたのだろうか。この点に疑問が残る。本節では、その理由を確認したうえで、これが適切かどうかを吟味する。

その理由は、『イデーン I』での研究区域を獲得する際に混乱がもたらされるところにあるとされる（cf. III/1, 182）。フッサールは、これをあまり立ち入って論じては

10. こうした解釈は、フッサールを緩やかな基礎づけ主義者として認めるものである。これについて詳しくは、Berghofer [2018]を参照。

いない。それについては、次の簡潔な論述があるだけである。

> ちなみに、時間は、さらに後に続く諸研究から判明するように、一つの全く完結した問題領圏、しかも格別の困難を伴った問題領圏を表わす名称である。われわれのこれまでの論述は、一つの次元全体をいわば秘密にしており、しかも必然的に秘密にせねばならなかったということ、というのも、もっぱら現象学的態度においてのみさしあたり見えてくるもの、しかも、その新しい次元を見て取らずとも完結した研究区域を成すものを、混乱なく獲得するためだということ、こうしたことがのちに明らかになるだろう。われわれが還元によって取り出して準備した、超越論的な「絶対的なもの」は、まことには究極的なものではない。それは、それ自体で或る深みにおいて、また全く独自の意味において、構成されるものであり、究極の真に絶対的なもののうちにそれの根元源泉をもっている。(III/1, 181–182)

この一節だけでは、フッサールが危惧した混乱の内容は、十分に明らかではない。そこで、この一節にあるいくつかの用語を解釈することで、それをより明らかにしたい。

上の獲得されるべき「研究区域」とは、純粋意識を指す。これについては、上の引用した一節以前にある、次の論述から明らかである。

> したがって、経験の中で素朴に生き、そして、経験されるものすなわち超越的な自然を、理論的に研究する代わりに、われわれは「現象学的還元」を遂行する。このことを次のように言い換えてもよい。自然を構成する意識に属する諸作用を、それの超越的定立とともに、素朴な仕方で遂行する代わりに、そして、その諸作用に含まれる動機づけによって、常に新しい超越的定立を決定づけていく代わりに、——われわれは、これらすべての定立を「作用の外に」置き、それらに参加しない、と。つまり、われわれは、把握し理論的に探究する眼差しを、その絶対的な固有存在における純粋意識に向けるのである。(III/1, 106–107)

この一節にあるように、「現象学的還元」によって、「純粋意識」が探究の主題となる。これが「現象学の根本領野」とされており（cf. III/1, 107）、上の獲得されるべき「研究区域」にほかならない。また、これと同時に、本節のはじめに引用した一節にある「われわれが還元によって取り出して準備した、超越論的な『絶対的なもの』」が、

純粋意識を指すこと、これも明らかである。

ただし、純粋意識は、構成されるものである。このことは、「超越論的な『絶対的なもの』」が純粋意識に当たることを踏まえれば、本節のはじめに引用した一節の中に、端的に示されている。すなわち、純粋意識は、「それ自体で或る深みにおいて、また全く独自の意味において、構成されるもの」だとされている。この構成についてが、『内的時間意識の現象学』第 1 部第 3 章での主要な論題となっている。この箇所で、まさに働いている意識が、自分自身を一つの体験流として構成すると論じられる。これを踏まえれば、本節のはじめに引用した一節の中にある、「それ自体で或る深みにおいて、また全く独自の意味」における構成、「完結した問題領圏」、「究極の真に絶対的なもの」が、それぞれどのようなものなのかより明瞭になる。すなわち、「それ自体で或る深みにおいて、また全く独自の意味」における構成とは、意識の自己構成を指す。「完結した問題領圏」とは、意識の自己構成に関する議論を指す。「究極の真に絶対的なもの」とは、体験流を自己構成するまさに働いている意識を指す[11]。

フッサールは、純粋意識の獲得を、『イデーン I』でのさしあたっての考察段階に位置づけている。すなわち、「われわれが引きつづき拘束される考察段階は、あらゆる体験時間性を構成する究極的な意識という未知の深みの中へと降りて行くことをせずに、むしろ、体験を、それが統一的な時間的出来事として、内在的反省において呈示されてくるままに受け取る考察段階である」(III/1, 191–192)。この「体験時間性」とは、構成された体験流が具える時間性を指し、これを「構成する究極的な意識」とは、先程確認したように、体験流を自己構成するまさに働いている意識を指す。こうした「未知の深み」へと踏み込むこと、すなわち意識の自己構成に関する議論は、「われわれが引きつづき拘束される考察段階」の後、すなわち純粋意識についての議論の後に、位置づけられている[12]。

以上を踏まえれば、フッサールが危惧した混乱とは、構成された純粋意識を研究区域として分析する段階にまだ留まるべきであるにもかかわらず、それの自己構成に関する議論へと踏み込むことで、そのあるべき段階を外れることである。

では、そうした混乱を防ぐためという理由は、『イデーン I』で時間論が棚上げされる理由として、適切なのだろうか。

---

11. これに関する代表的かつ古典的な先行研究として、クラウス・ヘルト『生き生きした現在』（1966 年）を挙げることができる。同書でヘルトは、その「究極の真に絶対的なもの」を「究極的に作動する生き生きした現在」と呼ぶ（cf. Held [1966, 68–70]）。

12. これについては、「われわれが引きつづき拘束される考察段階」という文言以外にも、典拠を挙げることができる。例えば、本論冒頭で引用した箇所でも、「幸運にも、われわれは、準備的分析においては、その分析の厳密さを危険に晒すことなしに、時間意識の謎に立ち入らないでいることができる」（III/1, 182、強調引用者）と述べられている。

それは適切ではない。というのも、意識の自己構成に関する議論ではなく、意識の機能形式に関する議論が、『イデーン I』で意味志向の充実を論じる際に必要だからである。意識の機能形式に関する議論を補うだけならば、上のフッサールの危惧は杞憂に過ぎない。本論第 2 節と本節でそれぞれ確認したように、意識の機能形式に関する議論は『内的時間意識の現象学』第 1 部第 2 章で、意識の自己構成に関する議論は同書第 1 部第 3 章で、展開されている。これらを踏まえてより簡潔に言えば、同書第 1 部第 3 章の議論ではなく、同書第 1 部第 2 章の議論が、『イデーン I』での議論にとって必要である。『イデーン I』において棚上げすべきは『内的時間意識の現象学』第 1 部第 3 章の議論であり、その第 2 章まで棚上げするのは不適切である。

たしかに、フッサールは、『イデーン I』のいくつかの箇所で、把持・原印象・予持の結びつきについて触れている（cf. III/1, 167, 183–184）。例えば、次のように論じられる。

> まさに過ぎ去ったという意識が、今の意識に必然的に結びついており、こうした意識がそれ自身、これはこれで今である。どんな体験も、終わるという意識または終わったという意識なしには、終わることができない。しかも、その意識は、一つの新しい充実された今である。（III/1, 184）

この一節にある「終わる」ことについての議論は、具体的な今が幅を具えることを示唆している。というのも、何かが今まさに「終わるという意識」は、今が幅を具えていることではじめて成り立つからである。つまり、そうした意識は、その対象が〈今はもはやないこと〉として、〈今もなお〉把持されているからこそ成り立つのである。

しかし、具体的な今が幅を具えること、および、これを〈把持 - 原印象 - 予持〉によって説くこと、こうした議論にフッサールは踏み込まない。上の引用された一節の後で、フッサールは次のように述べている。

> この洞察をより詳細に展開し、そしてそれの大きな形而上学的帰結を証示すること、これをわれわれは、予告された将来の論述に委ねる。（III/1, 184）

この「形而上学的帰結」が何を指すのかについては、ここで立ち入る必要はない。目下の議論にとって重要な点は、「終わる」ことに関する議論が「より詳細に展開」されず、「将来の論述」として棚上げされたところにある。これが展開されていれば、具体的な〈今〉が幅を具えることを、〈把持 - 原印象 - 予持〉という意識の機能形式

によって説くことになる。しかし、結局のところフッサールは、『イデーン I』ではこの議論の目前で、踵を返してしまうのである。

## おわりに

以上を踏まえれば、フッサールは誤った自己理解の下、『内的時間意識の現象学』での議論を『イデーン I』で棚上げしたことになる。〈把持 - 原印象 - 予持〉という意識の機能形式に関する議論は、『イデーン I』での議論に混乱をもたらすことなく、これをより明確にすることができる。したがって、『イデーン I』で時間論が棚上げされたことは、適切とは言い難いのである。

最後に、これまでの議論が残した課題を簡単に示すことで、本論を閉じたい。フッサールは、反省を現象学の基本的方法に据え、まさに働いている意識を反省によって分析する。しかし、いくつかの先行研究が、ここに方法と目的との齟齬を指摘している[13]。簡潔に言えば、いくつかの先行研究は、〈まさに働いている意識は反省によって捉えることができない〉と主張するのである。もしこうした主張を受け入れるならば、フッサール現象学の多くの見解は、その根本から揺るがされることになる。では、こうした〈反省の問題〉からフッサール現象学を擁護できるのだろうか。これを検討することが、今後の課題である。

13. 例えば、Held [1966]、斎藤 [2000]、Zahavi [1999]、榊原 [2009]を挙げることができる。これらについては、佐藤 [2018]で詳しく比較検討した。

## 文献

Berghofer, Philipp [2018]: “Why Husserl is a Moderate Foundationalist.” *Husserl Studies* 34, 1–23.

Held, Klaus [1966]: *Lebendige Gegenwart. Die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik*, Nijhoff.

Husserl, Edmund: *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Nijhoff/Kluwer/Spinger, 1950ff. （巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。）

Zahavi, Dan [1999]: *Self-Awareness and Alterity. A Phenomenological Investigation*, Northwestern University Press.

植村玄輝［2017］:『真理・存在・意識——フッサール『論理学研究』を読む』、知泉書館。

斎藤慶典［2000］：『思考の臨界——超越論的現象学の徹底』、勁草書房。

榊原哲也［2009］：『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、東京大学出版会。

佐藤大介［2018］:「生き生きした現在は反省可能か——フッサール研究における先行研究の比較検討」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 45 号、65–82 頁。